観劇行為のメディア論
――「宝塚」を事例にして――

大阪大学大学院人間科学研究科　東　園子

◆　問題設定

ライブ・パフォーマンス―ある特定の場所で鑑賞
　←活字媒体・テレビ・インターネットとの大きな違い

メディア論―マスメディア・電子メディアが中心的な対象
　←→メディア＝情報を伝える媒介項
　　→舞台を一つのメディアとして捉えることが可能

舞台の物理的構成要素＝役者＋舞台装置＋照明
　　←役者が最大の要素

メディアに媒介されるコミュニケーション
　－「伝達次元の作用が情報内容を規定」（北田 2004:29）
　　→舞台に立つ役者の存在が、舞台で上演される物語から観客が受け取る意味をどのように規定するのか？
　　―宝塚歌劇（以下、「宝塚」）を例に考察

◆　「宝塚」の概要

・1914 年（大正３年）に第１回公演
　―箕面有馬電気軌道（現阪急電鉄）の沿線施設・宝塚新温泉で開催された「婚礼博覧会」のアトラクション

・出演者はすべて女性（＝「タカラジェンヌ」）―男役／娘役に分かれる

・公演―芝居＋ショー

・観客数：年間のべ約２５０万人
　　－女性ファン：約９割

◆　「宝塚」ファンの舞台の見方

「宝塚」の特徴が表れている一場面
―ショー『Cocktail ～カクテル～』（2002 年・花組）第 16 場～第 22 場
　　キャスト ― チャーリー：匠ひびき ・ クラウディア：大鳥れい

チャーリー：クラブのスターの役名
　　：匠ひびきの愛称
　→　クラブ「Charlie's Bar」のスター・チャーリーの物語
　　＝宝塚歌劇団を退団する匠ひびきの物語

観客が舞台の役にそれを演じる役者自身を重ね合わせて舞台を見ることを前提にした演出
　←ファンの間で役と役者を重ね合わせる舞台の見方が常態化していることを示す

◆　タカラジェンヌの四層構造

◇舞台上の存在の二重性

タカラジェンヌ―舞台上で、役だけでなく、自分の芸名と結びついた男役／娘役を演じる
　→舞台上のタカラジェンヌの姿には二重性が存在
　　「役名の存在」：上演される物語の登場人物
　　「芸名の存在」：個々のタカラジェンヌ独自の男役／娘役像

伊藤剛（2005）―マンガの登場人物＝キャラクター／キャラの二側面を持つ
　「キャラクター」：特定の作品世界と不可分
　「キャラ」：元の作品からの自律性と横断性を備える　→芸名の存在＝「キャラ」

◇舞台裏の存在の二重性

「宝塚」―バックステージ情報を豊富に提供（2 冊の月刊誌、専用のＣＳチャンネル等）
　←→タカラジェンヌのイメージを守るため、公開する情報を取捨選択
　　―本名・年齢を非公開→隠された情報があることがファンにも明白

→舞台裏のタカラジェンヌの姿にも二重性が存在
　　「愛称の存在」：ファンに公開された素顔
　　「本名の存在」：ファンに非公開の素顔

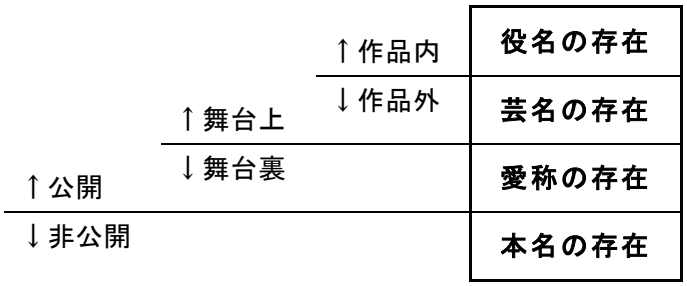

図１・タカラジェンヌの四層構造（東 2009:24）

『Cocktail』「Charlie's Bar」の場面
ファン―役名の存在（クラブのスター・チャーリー）の物語から、愛称の存在（チャーリー＝匠ひびき）の物語を読み取る

◆　舞台上の物語と舞台裏の物語の交錯

「宝塚」の舞台公演―異性愛・男同士の絆を中心的に描く
「宝塚」ファン向けのメディア―タカラジェンヌ同士の絆を強調
←ファン―舞台を見ながらこの両者を重ね合わせる

「宝塚」ファン―舞台で演じられる登場人物同士の絆に、オフのタカラジェンヌ同士の絆を見出す

◆　「宝塚」のリアリティ

舞台上の世界―虚構であることが強調された表現
＋舞台裏の世界―ありのままの真実ではないことが明白
↓
虚構度が高まるのではなく、むしろリアリティを生み出す

タカラジェンヌの四層構造
→観客の中で役名の存在の物語と愛称の存在の物語が重ねあわされる

舞台上の人間関係　←相互投影→　舞台裏の人間関係

→上演される作品で描かれる情熱的な恋愛や友情
　―普段から親密な関係にあるとされている劇団員同士が演じることで自然なものに感じやすくなる

→観客には見えない劇団内で展開されるタカラジェンヌ同士の友情
　―舞台上にオフの関係性が表れていると見なすことで、舞台で実際に目にしたような気になることができる

◆　付記・宝塚歌劇のアーカイブ＆ミュージアム

◇池田文庫

―阪急電鉄の私設図書館（大阪府池田市）
宝塚歌劇団発行の雑誌をすべて所有する他、演劇関連の資料を収蔵
一部資料を除き、誰でも無料で閲覧可能
展示室もあり、年数回企画展が行われる

沿革

1915 年　宝塚新温泉に図書室開設（来場者向けに、新刊雑誌や近刊の書籍を配架）
1932 年　演劇関連図書・雑誌、宝塚歌劇の上演資料、歌舞伎資料を収集する宝塚文芸図書館に
1949 年　池田文庫開館
宝塚文芸図書館の蔵書・資料類、宝塚歌劇に関する資料の網羅的収集、阪急電鉄資料、民俗芸能資料を収蔵
現在図書雑誌約 22 万冊の蔵書

（池田文庫Ｗｅｂサイト「池田文庫の概要」より
http://www.ikedabunko.or.jp/profile/　2010 年 6 月 9 日アクセス）

◇Salon de Takarazuka プチミュージアム

―宝塚大劇場に併設された展示室（入館料：400 円）

展示内容

・公演中の組の過去の公演の舞台衣装・小道具・舞台写真（写真撮影可能）
・テーマにあわせた舞台写真等を展示する企画展
・歴代スターの手形や写真パネル、宝塚関連書籍の閲覧コーナー等

◇**宝塚歌劇記念館**（閉館）

―閉園した宝塚ファミリーランド内にあった展示施設（無料）

旧宝塚文芸図書館の建物を利用

舞台写真等で宝塚歌劇団創設からの歴史を紹介

企画展・展示入れ替え等はなし

◆　参考文献

東園子、2006、「女同士の意味――「宝塚」から読み取られる女性のホモソーシャリティ」『ソシオロジ』社会学研究会、(157):91-107

――――、2007、「女同士が見せる夢――ファンは「宝塚」をどう見ているか」玉川博章・名藤多香子・小林義寛・岡井崇之・東園子・辻泉『それぞれのファン研究――I am a fan』風塵社、203-241

――――、2009、「「宝塚」というメディアの構造――タカラジェンヌの四層構造と物語消費」青弓社編集部編『宝塚という装置』青弓社、14-36

――――、2010、「女性のホモソーシャルな親密性をめぐる文化社会学的考察――「宝塚」と「やおい」のメディア論的分析を通して」2009 年度大阪大学大学院提出博士論文

北田暁大、2004、「観察者としての受け手」『〈意味〉への抗い――メディエーションの文化政治学』せりか書房、23-46